城崎を憶ふ

泉鏡花

青空文庫

雨が、さつと降出した、停車場へ着いた時で——天象は卯の花くだしである。敢て字義に拘泥する次第ではないが、雨は其の花を亂したやうに、夕暮に白かつた。やゝ大粒に見えるのを、もし掌にうけたら、冷く、そして、ぼつと暖に消えたであらう。空は暗く、風も冷たかつたが、温泉の町の但馬の五月は、爽であつた。

俥は幌を深くしたが、雨を灌いで、鬱陶しくはない。兩側が高い屋並に成つたと思ふと、立迎ふる山の影が濃い緑を籠めて、輻とともに動いて行く。まだ暮果てず明いのに、濡れつゝ、ちらちらと灯れた電燈は、燕を魚のやうに流して、靜な谿川に添つた。流は細い。横に二つ三つ、續いて木造の橋が濡色に光つた、此が旅行案内で知つた圓山川に灌ぐのである。

此の景色の中を、しばらくして、門の柳を潜り、帳場の入らつしやい——を横に聞いて、深い中庭の青葉を潜つて、別にはなれに構へた奥玄關に俥が着いた。旅館の名の合羽屋もおもしろい。

へい、ようこそお越しで。挨拶とともに番頭がズイと掌で押出して、扨て默つて顏色を窺つた、盆の上には、湯札と、手拭が乘つて、上に請求書、むかし「かの」と云つたと聞くが如き形式のものが飜然とある。おや〳〵前勘か。否、然うでない。……特、一、二、三等の相場づけである。温泉の雨を掌に握つて、我がものにした豪儀な客も、ギヨツとして、此れは悄氣る……筈の處を……又然うでない。實は一昨年の出雲路の旅には、仔細あつて大阪朝日新聞學藝

部の春山氏が大屋臺で後見について居た。此方も默つて、特等、とあるのをポンと指のさきで押すと、番頭が四五尺する〳〵と下つた。（百兩をほどけば人をしさらせる）古川柳に對して些と恥かしいが（特等といへば番頭座をしさり。）は如何？　串戲ぢやあない。が、事實である。

棟近き山の端かけて、一陣風が渡つて、まだ幽に影の殘つた裏欄子の竹がさら〳〵と立騷ぎ、前庭の大樹の楓の濃い緑を壓へて雲が黒い。「風が出ました、もう霽りませう。」「これはありがたい、お禮を言よ。」「ほほほ。」ふつくり色白で、帶をきちんとした島田髷の女中は、白地の浴衣の世話をしながら笑つたが、何を祕さう、唯今の雲行に、雷鳴をともなひはしなからうかと、氣遣つた處だから、土地ツ子の天氣豫報の、風、晴、に感謝の意を表したのであつた。

すぐ女中の案内で、大く宿の名を記した番傘を、前後に揃へて庭下駄で外湯に行く。此の景勝愉樂の鄕にして、内湯のないのを遺憾とす、と云ふ、贅澤なのもあるけれども、何、青天井、いや、滴る青葉の雫の中なる廊下續きだと思へば、渡つて通る橋にも、川にも、細〳〵とからくりがなく洒張りして一層好い。本雨だ。第一、馴れた家の中を行くやうな、傘さした女中の斜な袖も、振事のやうで姿がいゝ。

——湯はきび〳〵と熱かつた。立つと首ツたけある。誰の？……知れた事拙者のである。處で、此のくらゐ熱い奴を、と顔をざぶ〳〵と冷水で洗ひながら腹の中で加減して、やがて、湯

を出る、ともう雨は霽つた。持おもりのする番傘に、片手腕まくりがしたいほど、身のほてりに夜風の冷い快さは、横町の錢湯から我家へ歸る趣がある。但往交ふ人々は、皆名所繪の風情があつて、中には塒に立迷ふ旅商人の狀も見えた。

並んだ膳は、土地の由緒と、奥行をもの語る。手を突張ると外れさうな棚から飛出した道具でない。藏から顯はれた器らしい。御馳走は——

鯛の味噌汁。人參、じやが、青豆、鳥の椀。鯛の差味。胡瓜と烏賊の酢のもの。鳥の蒸燒。松蕈と鯛の土瓶蒸。香のもの。青菜の鹽漬、菓子、苺。

所謂、貧僧のかさね齋で、ついでに翌朝の分を記して置く。

蜆、白味噌汁。大蛤、味醂蒸。並に茶碗蒸。蕗、椎茸つけあはせ、蒲鉾、鉢。淺草海苔。

大な蛤、十ウばかり。（註、ほんたうは三個）として、蜆も見事だ、碗も皿もうまい〳〵、と慌てて瀬戸ものを噛つたやうに、覺えがきに記してある。覺え方はいけ粗雜だが、料理はいづれも念入りで、分量も鷹揚で、聊もあたじけなくない處が嬉しい。

三味線太鼓は、よその二階三階の遠音に聞いて、私は、ひつそりと按摩と話した。此の按摩どのは、團栗の如く尖つた頭で、黒目金を掛けて、白の筒袖の上被で、革鞄を提げて、そくに立つて、「お療治。」と顯はれた。——勝手が違つて、私は一寸不平だつた。が、按摩は宜しう、と緣側を這つたのでない。此方から呼んだので、術者は來診の氣組だから苦情は言

へぬが驚いた。忽ち、縣下豊岡川の治水工事、第一期六百萬圓也、と胸を反らしたから、一すくみに成つて、内々期待した狐狸どころの沙汰でない。あの、潟とも湖とも見えた……寧ろ寂然として沈んだ色は、大なる古沼か、千年百年ものいはぬ静かな淵かと思はれた圓山川の川裾には——河童か、獺は？……などと聞かうものなら、はてね、然やうなものが鯨の餌にありますか、と遣りかねない勢で。一つ驚かされたのは、思ひのほか、魚が結構だ、と云つたのを嘲笑つて、つい津居山の漁場には、鯛も鰹もびち〳〵刎ねて居ると、掌を肩で刎ねた。よくせき土地が不漁と成れば、佐渡から新潟へ……と聞いた時は、枕返し、と云ふ妖怪に逢つたも同然、敷込んだ布團を取つて、北から南へ引くりかへされたやうに吃驚した。旅で剣術は出來なくても、學問があれば恁うは駭くまい。だから學校を怠けては不可い、從つて教はつた事を忘れては不可い、但馬の圓山川の灌ぐのも、越後の信濃川の灌ぐのも、船ではおなじ海である。

私は佐渡と云ふ所は、上野から碓氷を越えて、雪の柏原、關山、直江津まはりに新潟邊から、佐渡は四十五里波の上、と見るか、聞きかするものだ、と浮りして居た。七日前に東京驛から箱根越の東海道。——分つた〳〵——逗留した大阪を、今日午頃に立つて、あゝ、祖母さんの懐で昔話に聞いた、栗がもの言ふ、たんばの國。故と下りて見た篠山の驛のプラットホームを歩行くのさへ、重疊と連る山を見れば、熊の背に立つ思がした。酒顛童子の大江山。百人一首のお嬢さんの、「いくのの道」もそれか、と辿つて、はる〳〵〝＼と來た城崎で、

佐渡の沖へ船が飛んで、キラリと飛魚が刎出したから、きたなくも怯かされたのである。——晩もお總菜に鮭を退治た、北海道の産である。茶うけに岡山のきび團子を食べた處で、咽喉に詰らせる法はない。これしかしながら旅の心であらう。——

夜はやゝ更けた。はなれの十疊の奥座敷は、圓山川の洲の一處を借りたほど、森閑ともの寂しい。あの大川は、いく野の銀山を源に、八千八谷を練りに練つて流れるので、水は類なく柔かに滑だ、と又按摩どのが今度は聲を沈めて話した。豐岡から來る間、夕雲の低迷して小浪に浮織の紋を敷いた、漫々たる練絹に、汽車の窓から手をのばせば、蘆の葉越に、觸ると搖れさうな思で通つた。旅は樂い、又寂しい、としをらしく成ると、何が、そんな事。……ぢきその飛石を渡つた小流から、お前さん、苫船、屋根船に炬燵を入れて、美しいのと差向ひで、湯豆府で飲みながら、唄で漕いで、あの川裾から、玄武洞、對居山まで、雪見と云ふ洒落さへあります、と言ふ。項を立てた苫も舷も白銀に、珊瑚の袖の搖るゝ時、船はたゞ雪を被いだ翡翠となつて、白い湖の上を飛ぶであらう。氷柱の蘆も水晶に——

金子の力は素晴らしい。
私は獺のやうに、ごろんと寢た。
而して夢に小式部を見た。

嘘を吐け！

ピイロロロピイ――これは夜が明けて、晴天に鳶の鳴いた聲ではない。翌朝、一風呂キヤヽ〳〵と浴び、手拭を絞つたまゝ、からりと晴れた天氣の好さに、川の岸を坦々とさかのぼつて、來日ヶ峰の方に旭に向つて、晴〳〵しく漫歩き出した。九時頃だが、商店は町の左右に客を待つのに、人通りは見掛けない。靜な細い町を、四五間ほど前へ立つて、小兒かと思ふ小さな按摩どのが一人、笛を吹きながら後形で行くのである。ピイロロロピイーとしよんぼりと行く。トトトン、トトトン、と間を緩く、其處等の藝妓屋で、朝稽古の太鼓の音、ともに何となく翠の滴る山に響く。

まだ羽織も着ない。手織縞の茶つぽい袷の袖に、鍵裂が出來てぶら下つたのを、腕に捲くやうにして笛を握つて、片手向うづきに杖を突張つた、小倉の櫂の口が、ぐたりと下つて、裾のよぢれ上つた痩脚に、ぺたんことも曲んだとも、大きな下駄を引摺つて、前屈みに俯向いた、瓢箪を俯向に、突き出た出額の尻すぼけ、情を知らず故らに繪に描いたやうなのが、ピイロロピイと仰向いて吹いて、すぐ、ぐつたりと又俯向く。鍵なりに町を曲つて、水の音のやゝ聞こえる、流の早い橋を越すと、又道が折れた。突當りがもうすぐ山懐に成る。其處の町屋を、馬の沓形に一廻りして、振返つた顔を見ると、額に隠れて目の窪んだ、頤のこけたのが、かれこれ四十ぐらゐな年であつた。

うか〳〵と、あとを歩行いた方は勝手だが、彼は勝手を超越した朝飯前であらうも知れない。

笛の音が胸に響く。

私は欄干にイんで、返りを行違はせて見送つた。おなじやうに、或は傾き、また俯向き、さて笛を仰いで吹いた、が、やがて、來た道を半ば、あとへ引返した處で、更めて乘つかる如く下駄を留めると、一方、鎭守の社の前で、ついた杖を、丁と小脇に引そばめて上げつゝ、高々と仰向いた、さみしい大な頭ばかり、屋根を覗く來日ヶ峰の一處を黒く抽いて、影法師を前に落して、高らかに笛を鳴らした。

——きよきよらツ、きよツ〳〵きよツ！

八千八谷を流るゝ、圓山川とともに、八千八聲と稱ふる杜鵑は、ともに此地の名物である。それも昨夜の按摩が話した。其時、口で眞似たのが此である。例の（ほぞんかけたか）を此の邊では、（きよきよらツ、きよツ〳〵）と聞くらしい。

ひと聲、血に泣く其の笛を吹き落すと、按摩は、とぼ〳〵と横路地へ入つて消えた。

續いて其處を通つたが、もう見えない。

私は何故か、ぞつとした。

太鼓の音の、のびやかなあたりを、早足に急いで歸るのに、途中で橋を渡つて岸が違つて、石垣つゞきの高塀について、打つかりさうに大な黒い門を見た。立派な門に不思議はないが、くゞり戸も煽つたまゝ、扉が夥多しく裂けて居る。覗くと、山の根を境にした廣々とした庭らしいのが、一面の雜草で、遠くに小さく、壞れた四阿らしいものの屋根が見える。日に水の

影もさゝぬのに、其の四阿をさがりに、二三輪、眞紫の菖蒲が大くぱつと咲いて、縋つたやうに、倒れかゝつた竹の棹も、池に小船に棹したやうに面影に立つたのである。

此の時の旅に、色彩を刻んで忘れないのは、武庫川を過ぎた生瀬の停車場近く、向う上りの徑に、じり〳〵と蕊に香を立てて咲揃つた眞晝の芍藥と、横雲を眞黒に、嶺が颯と暗かつた、夜久野の山の薄墨の窓近く、草に咲いた姫薊の紅と、――此の菖蒲の紫であつた。

ながめて居る目が、やがて心まで、うつろに成つて、あツと思ふ、つい目さきに、又うつくしいものを見た。丁ど瞳を離して、あとへ一歩振向いた處が、川の瀬の曲角で、やゝ高い向岸の、崖の家の裏口から、巖を削れる状の石段五六段を下りた汀に、洗濯ものをして居た娘が、恰もほつれ毛を掻くとて、すんなりと上げた眞白な腕の空ざまなのが睫毛を掠めたのである。

ぐらり、がたがたん。

「あぶない。」

「いや、これは。」

すんでの處。――落つこちるのでも、身投でも、はつと抱きとめる救手は、何でも不意に出る方が人氣が立つ。すなはち同行の雪岱さんを、今まで祕しておいた所以である。

私は踏んだ石の、崖を崩れかゝつたのを、且つ視て苦笑した。餘りの不状に、娘の方が、優い顔をぽつと目瞼に色を染め、膝まで巻いて友禪に、ふくら脛の雪を合はせて、紅絹の影を流

に散らして立つた。

さるにても、按摩の笛の杜鵑に、拔かしもすべき腰を、娘の色に落ちようとした。私は羞ぢ且つ自ら憤つて酒を煽つた。——なほ志す出雲路を、其日は松江まで行くつもりの汽車には、まだ時間がある。私は、もう一度宿を出た。

すぐ前なる橋の上に、頬被した山家の年増が、苞を開いて、一人行く人のあとを通つた、私を呼んで、手を擧げて、「大な自然薯買うておくれなはらんかいなア。」……はおもしろい。朝まだきは、旅館の中庭の其處此處を、「大きな夏蜜柑買はんせい。」……親仁の呼聲を寢ながら聞いた。働く人の賣聲を、打興ずるは失禮だが、旅人の耳には唄である。

漲るばかり日の光を吸つて、然も輕い、川添の道を二町ばかりして、白い橋の見えたのが停車場から突通しの處であつた。橋の詰に、——丹後行、舞鶴行——住の江丸、濱鶴丸と大看板を上げたのは舟宿である。丹後行、舞鶴行——立つて見たばかりでも、退屈の餘りに新聞の裏を返して、バンクバー、シヤトル行を睨むが如き、情のない、他人らしいものではない。——蘆の上をちら〳〵と舞ふ陽炎に、袖が鴎になりさうで、遙に色の名所が偲ばれる。手輕に川蒸汽でも出さうである。早や、その蘆の中に並んで、十四五艘の網船、田船が浮いて居た。

どれかが、黄金の魔法によつて、雪の大川の翡翠に成るらしい。圓山川の面は今、こゝに、其の、のんどりと和み軟いだ唇を寄せて、蘆摺れに汀が低い。彳めば、暖く水に抱かれた心地がして、藻も、水草もとろ〳〵と夢が蕩けさうに裾に靡く。おゝ、澤山な金魚藻だ。同町内

の瀧君に、ひと俵贈らうかな、……水上さんは大な目をして、二七の縁日に金魚藻を探して行く。……

私は海の空を見た。輝く如きは日本海の波であらう。鞍掛山、太白山は、黛を左右に描いて、來日ケ峰は翠なす額髪を近々と、面ほてりのするまで、じり〳〵と情熱の呼吸を通はす。緩い流は浮草の帶を解いた。私の手を觸れなかつたのは、濡れるのを厭つたのでない。圓山川の膚に觸れるのを憚つたのであつた。

城崎は——今も恁の如く目に泛ぶ。

こゝに希有な事があつた。宿にかへりがけに、客を乘せた俥を見ると、二臺三臺、俥夫が揃つて手に手に鐵棒を一條づゝ提げて、片手で楫を壓すのであつた。——煙草を買ひながら聞くと、土地に數の多い犬が、俥に吠附き戲れかゝるのを追拂ふためださうである。駄菓子屋の縁臺にも、船宿の軒下にも、蒲燒屋の土間にも成程居たが。——言ふうちに、飛かゝつて、三疋四疋、就中先頭に立つたのには、停車場近く成ると、五疋ばかり、前後から飛びかゝつた。叱、叱、叱！　畜生、畜生、畜生。俥夫が鐵棒を振舞すのを、橋に立つて見たのである。其の犬どもの、耳には火を立て、牙には火を齒み、焔を吹き、黒煙を尾に倦いて、車とも言はず、人とも言はず、炎に搦んで、躍上り、飛蒐り、狂立つて地獄の形相を顯したであらう、と思はず身の毛を慄立てたのは、昨、十四年五月二十三日十一時十分、城崎豐岡大地震

大火の號外を見ると同時であつた。

地方は風物に變化が少い。わけて唯一年、もの凄いやうに思ふのは、月は同じ月、日はたゞ前後して、——谿川に倒れかゝつたのも殆ど同じ時刻である。娘も其處に按摩も彼處に——其の大地震を、あの時既に、不氣味に按摩は豫覺したるにあらざるか。然らば八千八聲を泣きつゝも、生命だけは助かつたらう。衣を洗ひし娘も、水に肌は焦すまい。

當時寫眞を見た——湯の都は、たゞ泥と瓦の丘となつて、なきがらの如き山あるのみ。谿川の流は、大むかでの爛れたやうに……其の寫眞も赤く濁る……砂煙の曠野を這つて居た。木も草も、あはれ、廢屋の跡の一輪の紫の菖蒲もあらば、それがどんなに、と思ふ。

——今は、柳も芽んだであらう——城崎よ。

大正十五年四月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集　巻二十七」岩波書店
　1942（昭和17）年10月20日第1刷発行
　1988（昭和63）年11月2日第3刷発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
※表題は底本では、「城崎《きのさき》を憶《おも》ふ」となっています。
※表題の下にあった年代の注を、最後に移しました。
入力：門田裕志
校正：米田進
2002年5月8日作成
2016年2月2日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

城崎を憶ふ

泉鏡花

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/